
十二月の織姫

景雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十二月の織姫

【Nコード】

N8162Z

【作者名】

景雪

【あらすじ】

美紀は都内の上場企業に勤めるOL。そう遠くはない実家に帰省した際に、母のせいで元恋人の祟を思い出してしまい、苛々が募る。美紀は都内のアパートに戻る前に祖母が入居するグループホームに寄り、祖母が書いた短冊を見つける。そこには、亡き祖父を想って書いた祖母の言葉が記されていた

星に願いを

「あたし、五時には帰るよ？ 明日仕事だし」

美紀はそっけなくそう答えた。年末の繁忙期で業務は多忙だ。

「分かってるわよ。でもおばあちゃんには会っておきなさい」

母は一旦言葉を切って、ゆっくりと続けた。

「寒くなると、年寄りには体調を崩すから。おばあちゃんは九十を過ぎてるのよ？ もう何回会えるか……」

正直に言って、美紀はうんざりしていた。祖母のことが嫌いなわけではない。けれど、実家に帰る度に祖母の入居するグループホームに行かされるのは、義務以外の何物でもなく嫌気がさしていた。

「今会っておかないと……」

「分かってるって。言わなくても分かってるよ」

母の言葉を遮り、美紀は語気を強く言葉を放ったが、苛立ちをそのまま出してしまったことを後悔した。内孫の美紀は十八まで祖母と一緒に暮らして可愛がってもらった。恩も十分感じている。そんなことは分かっている。分かっているからこそ、母にあれこれ言われたくない気持ちがある。

美紀は実家から電車で一時間のアパートで一人暮らしをしている。そう遠くはないので、実家には月に一回は帰省している。アパートに帰る道すがら、美紀は母の運転する自動車の助手席に乗り、生まれ育った埼玉県北部の田舎町をばおつと眺めていた。美紀が一人暮らしをしている都内に比べれば、別の国のように空が暗く星が多い。美紀は信号で停車する度に窓から覗く星の数を無言で数えた。

「美紀、あの人とはどうなったの？ お付き合いしていた人」

「別れた」

「そう」

積極的には話したくないことなので、美紀は適当に短く答えた。

母が言及したあの人は、以前交際していた佐藤崇のことだとすぐに分かった。別れてもう一年半になる。

「仲良かったじゃない。お似合いだったと思うけど」

「やめてよ。その話は」

無言になると、コンパクトカーの狭い車内は余計に窮屈に思えて仕方ない。崇は大学の同級生で、大学の三年半と社会人になってから三年半、合計七年間交際していた。二人は二十六歳になっていたし、友人からはいつ結婚式の招待状をくれるのかとちゃかされていた。けれど、別れは突然やってきた。きっかけはつまらないことだったが、小さなひびが大きな亀裂となり、再び修復されることはとうとうなかった。美紀は別れる直前のやり取りを思い出す。

「まだ諦めないの？ 公務員。もう五回も落ちてるのに」

「うん。やりたいことがあるから」

公務員になつてやりたいこと？ 口実でしょう？ 結局安定とか、仕事が民間ほどシビアじゃないところに惹かれてるんでしょう？ もうちょっとでそう問かけるところだったが、美紀はぐっと堪えた。

「何を、やりたいの？」

「もう利益ばっか考えるのは疲れちゃったからさ、利益度外視で働きたいんだよね。市民のために」

「……具体的に、何よ？ 良く分からない」

「戸籍とか、住民票とか、道路とか、公的住宅とか、もうからなくて民間じゃできない、でも必要な仕事をやりたい」

「ふーん……。なんか、つまんないよね？ 夢が公務員つてさ。落ち着いちゃってるっていうか」

「美紀は？ 何になりたいの？」

そう問いかけて美紀は答えることができなかった。就職活動の時、美紀は知名度や人気、福利厚生、給与などで就職候補を決めた。結果として誰もが知っている上場企業の一般職になったのだが、手放して満足な結果だとは言えない。自分がやりたいことが何であ

るのか、自分は何が得意なのか、社会にどんな形で貢献しているのか、美紀は胸を張って言い切ることができなかった。

「なに、それ」

「え？」

「あたしが、何の目標もなく生きてるって言いたいのか？」

「そんなこと言っていないよ」

沈黙が訪れ、結局そのまま会話はなかった。その日は泊まらずに、自分のアパートに帰った。驚くべきことに、そんな些細なことがきっかけで二人は破局を迎えた。

「あたしのこと、馬鹿にしてるんでしょう？」

「美紀、俺の話も聞いてよ」

「公務員の彼女作ればいいじゃん？ 税金泥棒同士さ？」

「何だよ。その言い方」

一緒にいた七年間が何の意味も成さなくなった気がして、美紀は心臓をえぐられるような強烈な虚しさを感じた。

祖母が入居するグループホームは二つのユニットに分かれている。各ユニットは定員九名で、祖母は二階のユニットで暮らしている。

グループホームは特別養護老人ホームと違い、少人数で暮らす家庭的な雰囲気だ。大規模施設の機械的な介護に抵抗があった母が、このグループホームに決めた。祖母は軽い認知症を患っていたが、いつも静かににこにこしていた。物忘れはあったが、祖母はどこにでもある九十過ぎのおばあちゃんだった。

「これ、何？」

祖母の部屋にある観葉植物についているそれを美紀は指さした。

「あら。今まで気付かなかったの？ 三年前に入った時からあったわよ？」

「……だつて、こんなに小さいし」

一見するとそれは七夕の時に笹に結ぶ短冊のように見えた。

「おばあちゃんが書いたのよ。入った時はちょうど七夕の時期だ

ったから」

美紀は短冊のような紙片を手にとった。筆書きで書かれているのだが、余りに達筆過ぎて読むことができない。

「何て、書いてあるの？」

美紀は母を見てから、祖母に視線を移した。祖母はベッドで寝息をたてている。

「中尉殿が、無事帰還されますようにって」

「え？」

「おじいちゃんよ。戦争で亡くなったおじいちゃん」

美紀の母方の祖父は戦死した。詳しくは知らないが、戦争で死んだことだけは聞かされていた。

「おじいちゃん。死んじゃったんでしょ？」

「そうね。でも、おばあちゃんは生きて還って来って信じているのよ。だって、遺骨も遺品も戻ってきてないんだから」

祖母の寝顔を見ると、穏やかに、皺の一本一本をゆっくりと動かしながら眠っていた。静か過ぎてこのまま二度と起きることがないように思えたが、怖くなってすぐ想像をかき消した。

東京のアパートに戻って、美紀は手早く寝る準備を済ませてベッドに入った。翌日、連休明けで仕事に行かなければならないのと思うと気分が沈んだ。美紀はベッドから上半身だけ起こし、すぐ横の窓を開けた。冬の外気が風呂上がりの肌を一気に冷やし、火照りが心地良く治まっていくのを感じた。十二月の夜空は澄んだ空気に星が無数に輝き、都内でこんなに多く星が見えることを初めて知った気がした。

「あ。流れ星」

視界の左上から右下に向けて、流れ星が一つ落ちた。美紀はすぐさままぶたを閉じ、無言でつぶやいた。

おばあちゃんがおじいちゃんに会えますように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8162z/>

十二月の織姫

2011年12月25日23時46分発行